

4 2養鶏場におけるワクモ対策と生産性への効果

トミクトモミ
本橋のぞみ・○富田智美（三重県南勢家畜保健衛生所）

ワクモは鶏に寄生し吸血する外部寄生虫で、近年トリサシダニに代わり最も厄介な被害因子として注目を集めている。今回、ワクモ被害のあった管内2農場にて定期的に農場に立ち入り、対策及び指導を行った結果、改善効果が見られ生産性も向上したのでその概要を報告する。農場はどちらも採卵鶏農場であるが、飼養形態が低床式開放ケージ鶏舎（A農場）と高床式平飼い鶏舎（B農場）と異なる農場である。

A農場は、平成25年度より対策を行い、平成26年度にはワクモ被害の軽減、生産性の向上に成功した。しかし薬剤散布が頻回となり対策における農場主の負担が大きかったため、無理なく続けられる効果的なワクモ対策を模索した。B農場は、平成26年夏前にワクモが大量発生、斃死数増加、産卵率も低下した。その際A農場での改善事例を知り家保へワクモ対策の指導依頼があり、対策を実施した。

対策としていくつかの改善策を取り入れた。A農場は、段ボールを用いた鶏舎内のワクモ増殖モニタリングを継続して実施。また、使用薬剤の感受性試験を行い、効果のある薬剤を2種類選び、それを交互に使用することで薬剤の効果低下を防止した。さらに、殺虫剤に高濃度界面活性剤入り食器用洗剤を混合し殺虫剤の効果が延長し薬剤散布の頻度を減らすことで、農場主の労力負担、コスト削減が可能となった。B農場については、鶏舎内のワクモ増殖モニタリングを毎月行い、増殖場所を把握し重点的に消毒を実施した。オールアウト後、洗浄工程においてワクモの隠れ場所となるホコリや糞塊を徹底的に除去し、有効薬剤が満遍なく届くようにした。鶏の導入後は、有効薬剤を散布したのち、さらに効用期間の長い薬剤を最後に散布することで、それ以降の薬剤散布頻度を減らした。また、鶏舎内に設置されている止まり木を上からぶら下げる構造に改造し、止まり木も断面がコの字型の物からパイプ型に変更し、さらに両端をテープでふさぎワクモが入り込めないようにした。

対策の結果、A農場は26年度、鶏舎内のワクモ捕獲数が5月に急激に增加了が、27年度は増加することなく低い水準を保つことができ、1羽あたりの4月から6月の月別平均産卵量は1.32kg/月から1.49kg/月に增加了。B農場では、26年度と比較して6月の死亡率が11.6羽/日から2.43羽/日に減少。さらに、産卵率も78.2%から86.7%に上昇した。

2農場とも効果的なワクモ対策を確立することができ、対策コストや労力面で農家の負担を軽減することができた。また、対策を行うことで農家自身のワクモに対する知識や衛生意識が向上し、農場全体の衛生管理レベルも向上にもつながった。今後も継続可能なワクモ対策を構築し生産性向上に努めたい。